

外は応仁の乱、中は「なぞなぞ遊び」？

言葉遊びをしない人生なんて

言葉は使わないと錆びつく。錆びついた代表が、「肅々と」とか「前向きに」といったお役所言葉だ。遊び心ゼロ。だいたい「ごまかしだから、誰にも届かない。言葉遊びをせんとや生まれけむ」その第一人者に聞いた。

大阪教育大学教授
小野恭靖

●おの・みつやす 1958年静岡県沼津市生まれ。早稲田大学卒業。著書に『ことばと文字の遊園地』『ことば遊びへの招待』（新典社新書）、『さかさことばのえほん』（鈴木出版）など。

ホントはすごいオヤジギャグ

——言葉遊びの魅力について教えてください。

本当に世代を超えて子供からシニアの方まで楽しむことができるんですよ。子供には日本語の楽しさや、語彙力を増やすことになり、シニアの方には脳のトレーニング、

脳の活性化につながります。そして何よりコミュニケーションの潤滑油になりますね。

オヤジギャグは「さむーい」とか揶揄されたりしますが、立派な一つのコミュニケーションです（笑）。わざとオヤジギャグを言わせたい人だっているわけじゃないですか。オヤジギャグにしても、人間関係をどのようにつくるかについての一つの

方法だと思えますよ。

——そもそも小野さんが言葉遊びの研究をするきっかけは何だったのですか？

どういわけか子供のときから日本語に関心があったんです。小学校五、六年生のとき、魚偏や木偏の漢字が書いてある湯飲みを集めようと思って、魚偏は近所のお寿司屋さんからもらうことができたのですが、

木偏の湯飲みはなかなか手に入らない。それを聞きつけた大工の叔父が、取引のある材木屋から木偏の湯飲みをもらってきてくれたんです。魚偏と木偏の湯飲みがそろったことがうれしくて、夜、枕の近くに二つ並べて寝ましたね。

似たような漢字がたくさんあって、しかも全部意味が違うのが不思議だった。偏が一緒でもつくりが違えば意味が変わりますし、同じつくりでも偏が変われば違う。魚偏に春なら「鱒」で、木偏に春だと「椿」。これが面白かった。

漢字のほかには、家の近くにあったラーメン屋の名前が「9」を三つ並べて「サンキュー」と読ませるお店でした。「サンキュー」が「ありがとう」を意味するのは、もちろん知っていました。そのときは表記の仕方と、読ませ方が面白かった。

そういうことに関心を持っていたんです。

まだあります。私の実家は静岡の沼津ですが、祖母が日帰りバスツアー好きで、山梨のぶどう狩りに連れて行ってもらったときのことです。バスガイドさんが「山があっても山梨県、貝がなくとも甲斐の国」と話していたのが印象に残りました。他愛もないしゃれなのですが、日本語には同じ発音の言葉がたくさんあって、それらが違った意味を持つことがある。それがあるから面白い言葉や言い回しになるんだと思っただけです。

そんなことから日本語や漢字に関心を持ち始め、大学（早稲田大学）で日本文学を勉強し、卒論内容を考えていたときのいまの研究との出会いです。中島みゆきの歌などがすごく好きなんですけど、そこから昔の歌

にはどんな歌があったのかと興味を巡らした。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康のころの歌など資料がけっこう残っていますので、戦国時代の歌の研究を始めてみたのです。始めてみると、同音異義を利用した歌がたくさん出てきて、それですます日本語に惹かれたのと同時に、同音異義を活用することが文学のいちばんの魅力だと思っただけです。以来、日本の古い歌と言葉遊びとを両輪にして研究を進めてきました。

どこの国の言葉もそうですが、日本語は日本人の考えが反映されたものです。日本語の中で同音異義が多いのは、おそらくそれを面白いと感じていたから大切にされてきたんじゃないか？ と考えています。

現代でも同音異義を活用したダジャレや、いわゆるオヤジギャグがありますが、決してバカにされるよう